

## 第6回英語教育改革FD

### 全学英語教育新カリキュラム初年度を振り返って

日時： 平成24年3月29日（木）12時55分～14時25分

会場： 新潟大学総合教育研究棟B棟251講義室

プログラム内容：

- I. 獨協大学GPシンポジウム「アカデミックスキルとしての英語教育  
- 学士力育成のための共通教育の取り組み」に参加して（話題提供）  
人文社会・教育科学系准教授 秋孝道
  
- II. 新潟大学全学英語教育新カリキュラム初年度を振り返って
  1. 新カリキュラムの概要について  
教育・学生支援機構教育支援センター准教授 ハドリー浩美
  2. オープンフロアディスカッション  
司会：人文社会・教育科学系准教授 本間伸輔

参加者： 19名

司会（本間伸輔先生）：本日司会を務めさせていただきます教育学部の本間です。よろしくお願い致します。本日は「新しいカリキュラムを振り返って」という題名になっておりますが、前半はまず先日獨協大学で行われました大学英語教育関係のシンポジウムに人文学部の秋先生がご参加してこられましたので、まず秋先生からその報告をいただきたいと思います。その後その内容に関して質疑応答をし、その後本日のメインのほうですが新カリキュラム初年度を振り返ってということで、インフォーマルな形で皆様よりディスカッションにより問題点を指摘していただいたり、また上手くいった点をお披露目していただきたいと思います。それではまず開会の挨拶を、英語企画部代表である人文学部平野先生よりいただきたいと思います。

平野幸彦先生：こんにちは。新年度を間近に控えての非常にお忙しい時に貴重なお時間を割いて下さりまして、どうもありがとうございます。今本間先生のほうからお話がありましたような形で進めさせていただきますが、本FDの趣旨をちょっとだけ、わたしの観点からということですが、それを説明させていただいてご挨拶に代えさせていただきます。1つは大学の英語教育の目的をもう一度考える、もう一度というか改めてというか再確認したいということです。何のために大学で英語を教えるのかということですね。それでよく引き合いに出されることに「EGP」と「ESP」、「English for General Purposes」と「English for Specific Purposes」の両極がある、と。これを平たく言ってしまうと、「EGP」というのは従来の一般教養の英語、それに対して「ESP」のほうは、大学での学習に特化した、大学で学習を進めていく上で必要不可欠な英語運用能力を身に付けるということになるかと思います。ご承知のように今年新カリキュラムが始まったわけですが、あ、本当は最初に申し上げておくべきだったんですけど、初年度にも拘わらず、細部ではいろいろおありかと思いますが、全体的に円滑に終えることができたのは、ひとえに皆様のご協力とご尽力の賜物だと改めて感謝申し上げます。さて、この新カリキュラムではその目標を「ESP」、それも「English for Academic Purposes」に位置付けさせていただいたわけです。あともう1つは、授業を進めていく上でかつては個々の先生の裁量にお任せしてクラスごとに教材も違えば教え方も違うし目標・目的とするところも違うという、そういうスタイルだったんですね。それと正反対の極にあるものは、大学の英語教育全体で1つの目標を定めて、それに向かって全ての教員が教えるというもの。極端な例としては教材も同じにするという、実際にそういうことをやっている大学もあるわけですね。ですが本学では、そこまでは踏み込むことはしなかった。ただ、目的という点ではある一定のものを定めて、それを念頭に置いて先生方に授業を行っていただくと、そういう形にしたわけです。そういうことを一応確認した上で、そういう趣旨で新カリキュラムを立ち上げたということをご理解いただいた上で、ご議論していただければと

思います。それに関連して先ほどお話がありましたように、先日埼玉の獨協大学で、そこでこの「EGAP」 「English for General Academic Purposes」を3年間実践してきたということ、それについての報告のシンポジウムがありまして、企画部から秋先生に行っていただきました。それを1つの話題提供といたしまして、本学の英語教育、全学英語教育のあり方を考える1つの参考とさせていただきたいということです。それが済みましたら、1年間新カリキュラムをやってみて皆様いろいろお思いになったことがおありかと思います。後期のアカデミック英語のライティングのアンケートにご協力ありがとうございました。一通り目を通させていただきました。やっぱり1番大きな問題というのは添削ですね。その負担をどのように軽くしていくかということに役立つティップス等があれば是非こういう場で共有して、半年空いてしまうわけですけれども来年度の2学期に活かしていただければというふうに思っております。今回のFDはだいたいそのような趣旨で開かせていただくものですので、どうかその点念頭に置いていただいて活発なご議論を賜ればと思います。よろしくお願いいたします。

司会：はい、どうもありがとうございました。それでは獨協大学シンポジウムのご報告を、秋先生よりいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。秋先生の発表はハンドアウト、レジュメがありますが、皆さんお取りになっていますでしょうか？ よろしいでしょうか。それではお願いします。

秋孝道先生：秋と申します。よろしくお願いいたします。埼玉県草加市の獨協大学に出張していろいろ話を聞かせていただきましたし、いろいろ資料もいただきました。ちょっとこの資料をお返しします。資料とか話を聞かせていただいたんですが風邪もいただいてしましまして、後半の部分は頭が朦朧としてあんまりよく覚えていない部分もあるんですが、シンポジウムの前半の2時間はしっかり覚えているんですけども、その後ちょっと怪しいところがありまして、ちょっとしばらく伏せていましてまだ完全に治っていないんですが、記憶を辿りながらお話をしたいと思います。それでハンドアウトのこういう日本語がいっぱい書いてあるのがあるんですが、獨協大学ではGPプログラムが採択されていて、その名前が「学士力育成に資するEGAP英語教育の充実」という名前です。1・2・3・4・5・6・7・8と番号がふってありまして、どうしているのかということが書いてあります。これを後ほど具体的に見ていきたいと思います。それでパワーポイントとそれからハンドアウト等を見ながらのシンポジウムではあったんですが、ちょっと分かりにくいところがありまして、その点については後で説明したいと思います。まずこのハンドアウトをご覧ください。獨協大学に限らないんですが、やはり学士力から見て教養英語教育はどうあるべきかと

いう、そういう立場から物事を考えるというのが中心になっているんです。この右側ですね全カリ英語の教育目的の1ということで、一般学術目的の英語の教育ということがうたわれています。ちょっと見づらいんですが「全ての専門に共通する基礎的な学術言語技能プラス英語」と、その四角の中に書いてあります。その下に「中学・高校英語、一般コミュニケーション英語の延長ではない」と、こういう捉え方ですね。それからこの2番目「全カリ英語の教育目的が自律英語学習者の育成と支援」ということで、授業外学習習慣の育成と継続、それから卒業までの学習支援というそういう目的もうたわれています。独協大学ではどういう英語教育がなされてきたかということと2003年「アカデミックイヤー03」ですね、2003年・2004年・2005年までは「EGP」を教えていたようです。それでその年に学生満足度調査というものを行いまして、その右はちょっと黒くなっちゃっているんですが、単独協議の話し合いなどをして「EGP」から「EGAP」へ変更がなされた。2006年度から変更がなされて3年後の2009年に文科省のGP事業に採択されて、今年度が最終年度であったということです。どのような取り組みをしてきたかということが、ここですね。「学士力育成に資するEGAP英語教育の充実」ということなんです、まず皆さんのお手元に回っていると思うんですが、「英語ハンドブック」というのが作られています。これはご覧いただいたら分かると思うんですよ、大したものではありません。新潟大学のほうがハンドブックにしても、それからポータルにしても充実していると思います。それから英語学習サポートルームの資料が回っていると思うんですが、これも2010年から始めたそうで、新潟大学でも来年度から行いますのでさほど突出しているなというふうにはちょっと考えられないということですね。どこが優れているのかというと英語学習ロードマップというシステムがあるそうで、これは新潟大学でいいますと学務情報システムみたいなもので、英語に特化されたものがあってそれでいろいろなことが分かるということです。わたしが配布したハンドアウトは色が潰れていてよく分からないんですが、実は現物も潰れていましてこれは読めないんですね。わたしがここで読もうと思っても読めないですよ。大きなスクリーンにパワーポイントで映された瞬間だけ見えたんですけど、直ぐ次のページに行ってしまうと具体的にどういうものかというのは、ちょっとまだ分かりかねるということで。最初のページのハンドアウトの8つのプロジェクトの「2」ですね、ここでちょっと考えてみますと。画面上に個々人の履修科目・TOEICスコア・学内講座・学習相談結果等を表示し、学生が4年間の英語学習計画を立てることを支援すると。学習記録と計画を視覚的に捉え目標に向かって努力する指針を提供すると、こう書いてあるんですね。ちょっと分かりづらかったんであんまりこれ以上の説明できないんですが、もう1つ立派だなと思ったのが、「Can-do List」というものです。これはそのハンドアウトの1番下の左右に書いてあるんですが、潰れていますがもともとのハンドアウトでも殆ど分からないんですよ。

読めない状況になっています。眼鏡を外してもちょっと見えないですけど。それからあとその右下の部分ですが、これは「reading listening writing speaking vocabulary」になっているようです。ここのところについてももう少し分かりやすく教えて欲しいという要望を出したんですが、まだ返事は来ません。報告書を送っていただけることになっていますので、もしかしたらそこで詳しく見ることもできるかもしれませんが。段階別に応じて「Can-do List」を作っているっていうのは、これは立派だなと思います。この1ページのハンドアウトの「1」で言いますと、「学生が技能別に作られたリストを使って自己評価し学習することを支援する。教員の学習達成到達目標に至るため授業の更なる充実を図る。」と。GPの中で目立つのは多分ここなのかなと、そういう気がしました。それから共通教材ですが、リスニングのパイロットテキストが今回回っていると思うんですが、それを作っていたみたいですね。そんなところで最後のページのハンドアウトになりますが、学生の反応などに関してはそこに書いてあるようにおおむね好評であるということのようです。それで次に筑波大学の取り組みについても説明がありました。他に茨城大学と国際基督教大学があったんですが、聴いていてあんまり参考にならないなと思ったんですが。それは1つは茨城大学の場合には卒業要件をクリアできるレベルに至った学生にだけ「EGAP」を課していると、だから「EGAP」の授業を一切受けない学生もいるわけです。それから国際基督教大学は「EAP」をもう60年間やってきていると言っていて、ご存知のように70分の授業が10コマぐらいあると、そういうカリキュラムですからちょっと新潟大学とは比べようがない。参考になったのが筑波大学の取り組みでした。やっぱり学士力育成のための共通教育の取り組みということで、「学士力育成」というキーワードがあります。「英語カリキュラムの理念と目的 1」ですが、単に中学や高校の語学教育の延長ではなく、広くて深い教養を基盤とする学術的な専門教育の出発点として位置付け、学術的教養及び学術的言語技能を涵養すると。「2」では一般学術目的の英語に重点を置いた専門教育の出発点となる4年間を見据えたカリキュラムということをやっているようです。数年前にちょっとカリキュラムの変更があったそうなんですが、新潟大学で行っている理工英語読解に似た授業もあるそうで、それは「EGAP」と専門英語の橋渡しの授業で、担当しているのは英語の先生方なんだそうです。ちょっと面白いなと思ったのが初修外国語との関係でして1番下の左側ですが世界的な研究教育機関ということで、そこから一般学術の英語に重点を置いた英語教育という考え方が出てくると。それからもう1つの世界の問題の解決に主体的に貢献する人材の創出ということで、文化・社会の多様性の理解を育む初修外国語教育ということで、英語と初修外国語の役割分担が明確になされているというところが面白いなと思いました。実は新潟大学でも英語が「EGAP」の方向を向いて、初修のほうが地域性とか多様性とか文化・社会を向いているということで、ここら辺も共通の捉え方をしているんじゃない

かというふうに思いました。シンポジウムの結びだったんですが朦朧としてよく覚えていないんですが、ホームページに結論が載せてあったんでコピーしてきました。1枚目のハンドアウトに記しましたシンポジウムの結びで、「非常に多くの大学が、今英語教育の改革を進めている。共通外国語基礎教育の重要性を認識し、それをいかに学部教育と連動させ学士力の育成に結び付けていくかが重要であることを、本日のシンポジウムで強く感じられたのではないかと思います。そして、自律的に自らの責任で勉強する学習者を育てていくためには、教員は一方的に知識を伝授するのではなく学生が自ら気付くことをファシリテートする役割を担う必要がある。」と。筑波大学と独協大学の取り組みというのは新潟大学の取り組みに非常によく似ているんですが、なお新潟大学の「自律と創生」という考え方もやっぱり共通しているんだなど、そういう感想を持ちました。15分ぐらいしか喋っていないんですが、よろしいでしょうか。

司会：それではありがとうございます。それでは皆様方のほうから質問なりご意見をいただきたいと思いますが、どうぞ自由に発言いただけますでしょうか。

秋先生：先ほどの「Can-do List」なんですけど、わたしの印象としてはどうも情報を出さないようにしているような気がしました。つまりこれぐらいのレベルではこれぐらいのことを知っておかなくちゃいけないというのが、具体的なものとして蓄積されているんですね。それをどうも何か苦勞して作ったので外にあんまり見せたくないなっていうみたいなそういう印象を受けたんですが、そこを作るというのは本当に苦勞したんじゃないかというふうに思います。

平野先生：内輪の者が訊くのもなんですけど……ただこのことについては何も打ち合わせしておらず、また「Can-do List」の資料がよく見えなくてはっきりしたことは言えないんですけど、ただこれの発想というのは多分 EU でやっている「CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)」、あれが確かこういう「何々できる」というそういう書き方をしていることにあるのかなと。あと聴いていて思ったのは、うちとの絡みで言うと、今日も関係の方が何人かこの場にいらっしやるみたいですけど、NBAS (エヌバス) なんかとも絡んでくるところがあるのかなと。最近うちのシラバスでも到達目標を「何々できる」の形で書けということがあって、ここでもだから共通点の確認ということになるのかなと思うんですが、詳しい内容が分からないのではお答えのしようがないと思うんですけど、後日送られてくるかもしれない資料と EU の例の参照枠なんかを照らし合わせてみると、獨協でやっていることというのは少し見えてくるかなという……質問にもならない単に感想ですけど。以上です。

秋先生：NBAS というのはやっぱり英語学習とつながってくると思いますし、EU のそれは実際それに準拠しているというふうに言っていました。目を凝らして配布されたハンドアウトをよく読んでみますと、とつても読めないんですね（笑）。「ヘッドラインを理解することができる。記事を見つけることができる。」これぐらいしか読めないんです。だからこのハンドアウトは全く役に立っていないんですけれどもそういう項目が沢山あって、レベルごとに「Can-do List」が異なっていて、それをどれぐらい達成したかということで個々の学生が今どれぐらい勉強が進んでいるかというのが分かるようになっている。はい、そのとおりです。

司会：それでは他に何かご質問・ご意見ございますでしょうか？

土橋善仁先生：人文の土橋です。獨協大学の英語の授業の数ほどのぐらいでしょうか？新潟大学ですと、わりとやる気のある学生が選択できる授業が少ないというところで、特に3年生以降ですが、不満を少なからず耳にします。例えばこの最後のハンドアウトに、学部に関係なく英語の授業が多いというようなことも書いてありますし、さきほど回ってきた冊子を見てみましても、3年生までだと必修の授業があつて、4年生については科目の選択幅も広いように見えるんですけれども、その辺のところをもしご存知でしたら教えて下さい。

秋先生：この GP に携っている中心的な方が経済学部にも所属する英語教育の専門家で、そういうこともあつて経済学部生向けにはいろいろな授業がありまして。いわゆる全学英語科目ですが、1年生が「Academic Reading」、それから「Speaking in Academic Contents」という授業ですね。それから2年生が「Academic Listening Strategy」、それから3年・4年で選択科目が7個ぐらいありますね。ですから取ろうと思えば、かなり多くの授業は取れるようになっているようです。それから学部・学科専門の英語科目で「Specific Academic Purposes」というのもありまして、1年生だと「International Communication」、それから2年生が「International Communication」に「経営外国語」、それから「外書講読」ということで、これは専門の先生方がやるんだと思うんですけど、それにしてもかなりの数の授業を取ることができるという体制にはなっていると思います。そのことと直接関係するか分からないんですが、獨協大学の先生方は何度もおっしゃっていたんですが、非常勤の先生方が非常に多いと何度もおっしゃっていました。だから相当に多いんだろうなと思います。非常勤の先生方と意思疎通を図るために FD を非常に熱心にやっていて、非常勤の先生と常勤の先生と、それから副学長クラスの人とか、それから学部長の先生と

かも一緒になって FD をやって、意思疎通とか目的意識の統一とかそういうことをやっているようです。非常勤の先生方は何パーセント授業を担当しているんですかって聴こうと思っていたんですが、あんまりえげつないことを訊かないほうが良いのかなと思いました。「Can-do List」を含めてもう 1 回行って聴いてきたいなという、そういう感想は持っています。

司会：それでは他にございますでしょうか？それでは、どうもありがとうございました。

会場：(拍手)

司会：それではこれより後半のほうにまいりたいと思いますが、後半は「新カリキュラムを振り返って」ということで、問題点の指摘と上手くいった事例などをお披露目していただきたいと思います。まず最初に新しい本年度の新カリキュラムの概要を簡単におさらいということで、まずハドリー先生にお話しいただきと思います。よろしく願います。

ハドリー浩美先生：ハドリーです、よろしくお願いいたします。今回のカリキュラム改訂ですけれども、ご存知のとおり、近年の本学の英語教育改革は英語担当専任教員の激減、それから非常勤講師の担当コマ数の半減という厳しい条件下で進められてきたものです。平成 17 年度からのカリキュラムでは CALL 教材を利用しての自学自習、それから TOEIC の導入による学習意欲の喚起、習熟度別クラスの導入による授業の質的改善といった試みによって教育内容の充実を図ってまいりました。しかしながら開講コマ数は削減せねばなりませんでしたので、初修外国語が週 3 コマで英語が週 1 コマという状況が続いていたわけですが、学生のほうからも英語のコマ数を増やしてほしいという要望が出ていました。そこで今回は平成 16 年度からの英語教育改革 WG での確認事項に基づきまして、一般学術目的の英語「EGAP」を全学英语の主目的として明確に打ち出すとともに、1 年次の授業回数を週 1 回という状況から週 2 回、すなわち年 4 コマに増やすという量的改善を行いました。具体的には、旧カリキュラムの 2 単位科目「発展英語」を「アカデミック英語（リスニング）」と「アカデミック英語（ライティング）」という 2 つの 1 単位科目にしました。しかしながら、担当教員数は変わらないわけで、当然クラス定員が増えることになりました。そこで英語企画部としましては、こういった状況を少しでも改善するために、平成 24 年 4 月に「英語（外国語）自律学習支援室」を試行的に設置することにいたしました。これまでも、英語の自律学習支援として CALL 教材の導入や全学英语ポータルサイトの開設を行ってまいりましたが、現在準備を進めていますのは、「英語（外国語）自律学習支援

室」のパイロット版でありまして、先ほど配付しました資料の中にチラシが入っています。英語学習支援スペース「FL-SALC ミニ」という名称で、B棟3階E棟側の階段脇に小さな倉庫がありますけれども、そこに4月17日にオープンする予定です。開室日はチラシ作成時には決まっていなかったのですが、新学期授業開始と同時にオープンすることにしました。本学の学生なら誰でも利用可能で、お昼休みには図書を読んだり借りたりすることができます。多読教材も揃っています。グループ学習、そして、学習相談も提供する予定です。先生方も学生にお声掛けくださいますようお願いいたします。「アカデミック英語（リーディング）」の先生方には、先ほどお渡ししました名刺サイズのチラシを学生に配付していただきますので、よろしく願いいたします。

司会：どうもありがとうございました。それでは後半ディスカッションのほうに移りたいと思いますが、カリキュラム全体のことについて、あるいはご自身で担当された授業の例えば運営上ちょっと困ったことがあったとか、あるいはこういうことをやったら上手くいったとか何でも良いと思いますので、どうぞ自由にご意見を披露していただければと思います。また今ハドリー先生の最後にもありましたように、来年度これは初めての試みですが「FL-SALC ミニ」という英語学習支援スペースを設けることになっております。これについても何かお知りになりたいことがあれば、どうぞお聞きになって下さい。それではどなたでもどんな点でも良いですので、どうぞ自由に発言なさって下さい。

土橋先生：もしかしたら聞き逃したかもしれないんですけども、「FL-SALC ミニ」というのは何かの略称ですか。

平野先生：「Foreign Language Self-Access Learning Center ミニ」の略です。もともとはこの部屋は「外国語自律学習支援室」とか、あるいは「英語自律学習支援室」という硬い名前だったんですが、理系の先生か誰かから「それじゃ学生は来ないよ」と言われたので、よりキャッチーなネーミングをとということで知恵を絞った結果がこの頭文字という情けない体たらくなんですけど、そういうことでございます。

土橋先生：ありがとうございます。この名称からすると、将来的には初修外国語のほうもするんですか？

平野先生：そのへんは、今この場に初修の先生がいらっしゃると思うんですけど、これから詰めていくところです。「FL-SALC ミニ」っていうのはB棟3階で倉庫なんです、

来年度は。だから積極的に売り込んでいただきたい反面、あんまり期待されて来られても困るかなという感じがしているんですが、その次の年度からは、今ご承知のように図書館の改修をしております。あそこにそういう自律学習を進めるスペースがかなり広く設けられるんですね。そこの一角を正式に使わせていただくということになっておりますので、正式オープンは図書館のほうでということになります。

土橋先生：ついでにということで「FL-SALC ミニ」についてもいいですか？これを担当される先生方というのは、どのぐらいいらっしゃるんですか？

平野先生：担当することになっているのは、ハドリー先生と秋先生とわたしだけです。要するに企画部の人間が全学英語のカリキュラムのほうのコマ数をちょっと免除してもらって代わりに、そちらでやってみるということですね。単なる休み時間になってしまうのか、それとも授業以上に忙しくなるのかは、ちょっと開けてみないと分からないところなんですけど。まあ様子を見ながらですね、われわれにできることには限界がありますので、他の、もちろん専任の先生ということになるとは思いますけれど、こういう要望が出てきて、それに合うノウハウをお持ちの方々がいらっしゃったらリクルートすることが将来的にはあるかもしれませんので、その時はよろしくお願いします。

土橋先生：ありがとうございました。

高橋歩先生：非常勤講師の高橋です。わたしもこの「FL-SALC ミニ」について伺いたいのですが。昼休みと書いてありますが、時間帯は決まっていますか。授業のようなことをされるのでしょうか。このチラシを見ると日によってテーマが違うようですが、途中から入っても問題ないようなレッスンをされるのでしょうか。それからもう1つ、そのレッスンに参加しなくても、例えば火曜のグループ学習ご担当の先生が「リスニング初歩の初歩」をやっている時に、どうしても学習相談に応じてもらいたいという学生が来ることもあるかと思いますが、そのような場合はどうするのですか。

ハドリー先生：11時45分から12時55分までのお昼休みの時間に図書の利用ができます。毎週月曜から金曜までです。グループ学習は、いつでも途中参加が可能なたちにしてほしいと思います。具体的な内容については、参加者と相談しながら決めていくことになるのではないかと思います。どういったところがわからないのか、何をしたいのか、人数にもよりますが、実際にやってみないとわかりません。図書の貸し出しは、大学院生がスタッフとして担当してくれることになっています。お部屋は狭いのですが、入口のあたりで図書の貸し出しを行い、奥まったところにソファがありますの

で、そこらへんでグループ学習を行うつもりでいますが、これもまた実際どうなるかやってみないとわかりません。個別の学習相談については、やはり人手が足りませんので第1学期は金曜日だけになっています。ですが、グループ学習のついでにグループ学習担当教員に学習相談をするという流れも出てくるかと思えます。第2学期には、外部から専門の英語学習アドバイザーをお招きできたらと思っておりますが、予算を確保できるかどうか、今のところはっきりとしたお答えはできません。

平野先生：図書の貸し出しとかそういうのは良いですけど、一応4コマというか4つグループ学習を立ち上げているその目的というのは、いわゆるレメディアル教育の場をどこかで作らないとうちもちょっとまずい状況にあるかなということなんです。一部の学部などに推薦入試で入ってきて全学英語の普通のカリキュラムでさえついていくのが危うい子たちが、うちにもいるわけですね。それをそのために新たなコマを立ち上げるとか新たなコースを作るというところまではまだしなくても良かろうと思うんですけど、何かちょっと手を伸ばしてあげないといけないかなということで、ここに並んでいるリスニングの初歩と、あとその基礎英文法と個別相談というのは少なくともそういう意図で設けられていると考えていただければいいかなと思います。TOEICのスコアアップっていうのは、ちょっと性格が違うかもしれませんが。

司会：ありがとうございます。今「FL-SALC ミニ」についてご質問を2人の先生方から頂戴致しましたけども、他にも「FL-SALC ミニ」について何かお聴きになりたいことなどございますでしょうか？今年初めての試みですので。それではまた思いつきましたらいつでも結構ですので、おっしゃっていただければと思います。それでは授業やカリキュラム全体について、あるいはご自身担当の授業について何でも結構ですので、どうぞご自由に発言していただけますでしょうか？

カルメン・ハンナ先生：教育・学生支援機構のハンナです。アカデミック英語（リスニング）を担当していますが、去年は非常に学生が多かったんですね。これから平均サイズはなるのでしょうか？

ハドリー先生：40名クラスになりそうです。

ハンナ先生：去年、わたしは57名のクラスも担当しました。ちょっと心配ですが、40名で切るのでしょうか？

辻先生：本年度ですけれども、本年度は古いカリキュラムと新しいカリキュラムがちょっと

ミックスされていまして、ちょっと特別な事態ですね。ですから多かったです、新年度からもう新しいカリキュラムになりますので、一応平均では 40 名になると思います。ひょっとすると 40 名を下回るクラスもあるかもしれません。40 名が最初の設計ですので、それより更に来年から減っていくということではなくて、一応 40 名のところで止まってしまうということだと思います。アカデミック英語（リーディング）も同じでして、アカデミック英語（リーディング）も 50 名ちょっと本年度は入れてもらいましたが、今年はやはり 40 名になります。それでまだ名簿ができていません。学部から名簿が本当に授業開始の直前に届きますので、第 1 学期の授業開始直前に皆様のレターボックスに配付させていただきます。それを見ていただきますと、だいたい 40 名の学生が並んでいるはずです。個人的にはリーディングはまだしも、リスニングで 40 名というのはちょっと多いなというのは前々から感じていますが、取りあえず新カリキュラムになって 4 年ぐらいはこの体制かなという、そんな感じですね。

司会：ありがとうございました。今クラスサイズについてのご質問が出ましたけど、クラスサイズについて、クラスの定員についていかがでしょうか。何かご意見ございますでしょうか？

平野先生：リスニング、今 40 名という話でしたけど、リスニングの 40 名は何とかできますか？ 対応可能ですか？

ハンナ先生：そうですね、40 名はできますね。

平野先生：そうですね、はい。先ほど最初に申し上げたように、アンケートを見ていると、ライティングのほうの 30 名というのはあまりに多すぎる、20 名ならば何とかかなりそうだという方が多かったようなんですけど、その辺はどうですか？

ハンナ先生：20 名だとありがたいです。30 名は本当に多いです。学生のライティング課題を読むときは、すごく時間がかかるんですね。30 名だとちょっと負担が重いです。

平野先生：そのアンケート結果をちゃんと見たのが昨日なので、まだけっこう印象が生々しいんですが、これは本当にちょっと何とかしなきゃいけないなと思うんですね。思うんですが、それを 20 名にするためには教員の絶対数が増えないと難しいわけですね。というのはつまり非常勤の先生のコマ数を増やしたところで、結局同じ数の学生を相手にすることになっちゃう。非常勤に限らず専任でもそうなんですけど。クラス

サイズを小さくすることは物理的には可能かもしれないですね。ただ、その分多くの授業を開かなければならなくて、でもそれをやる人が同じであれば結局負担は変わらないので、それだと意味がない。ということは専任にせよ非常勤にせよ、別のプラスアルファでスタッフを純増しないと。すごく単純な考え方をすると例えば少なくとも1.5倍の非常勤のネイティブを要求するというのが通れば20名というクラスサイズは実現できるかもしれない。でもそれを通す力はわれわれにはなくて、訴えることはもちろん訴えますけど、それを認めてくれるのはもっと上のほうのところなので、われわれもどうにかしたいと思っても何もできなくて、はがゆい思いをしているというわけです。それとあとちょっともう1つ引っ掛かるのは、先ほど獨協では非常に非常勤の数が多いということを書いていましたけれど、獨協は埼玉ですから東京圏、首都圏なんですよ。つまり母集団が多いということ。新潟ではたして優秀な、今おやりになっていただいているようなネイティブの先生方をこれ以上集めることができるかという問題も1つあるかなと思うんですね。その辺は先生方のコネとかいろいろ駆使することによって克服できるのかもしれないんですけど、そういう問題もありまして。われわれとしては担当スタッフを増やしたい、ただそれには今言ったような幾つかのハードルがあると。増やす方向での努力は進めていきますが、その一方でアンケートの中に幾つか、例えば全部の課題を毎回添削するのは大変だったので、毎回全員ではなくて例えば一部を取り出してやってみるとか、そういう何か工夫をなさったというアンケート結果もあったと思うので、そういう何というんですかね、もう来年度はどうしようもない——少なくともクラスサイズは30名定員というのは仕方がないので、来年度を少しでも楽に乗り切るために何か工夫というか知恵、ティップスがあれば是非公表していただきたいなと思うんですが、いかがでしょうか？

司会：ありがとうございました。アカデミック英語ライティングのクラス定員についての問題が指摘されました。わたしもライティングを担当しましたので少し困った問題、自分自身の問題でもあるんですけども。多くのペーパーを添削していますとかなりの時間がかかってしまうというような問題があるわけです。その辺のところを解決するための良いアイデアをお持ちの方がいらっしゃいましたら、自分の授業ではこうやっていますというような何かそういう良いアイデアや実践例をお持ちの方いらっしゃいましたら是非ご披露いただきたいと思っておりますけれども、どなたかいらっしゃいますでしょうか？たまたま今日いらっしゃる非常勤の先生はライティングを担当された方はいらっしゃらないようにお見受けするんですけど、いかがでしょうか？添削の課題はどのぐらいの頻度で出されていますでしょうか？わたしの場合ですと2週に1回ぐらいの割合で、毎週出すのは最初から諦めまして、2週に1回の割合でだいたい60語ぐらいの簡単なものを書かせるという宿題を出してまして、他の出さ

ない週は小テストをやるということでやっていたけども、皆さんはいかがでしょうか？

高橋先生：私は、アカデミック英語のライティングを担当しました。理学部と工学部の、習熟レベルが最下位のクラスで、学生数は 25～26 名でした。テキストの英文を数か所空欄にして、その部分に自由に書き入れて、自分の文を完成させる練習を毎週 7～8 文させました。また、学生が書いた英語を添削するのにコレクションシンボルを使用しました。学生には、あらかじめコレクションシンボルの一覧表を配付し、各々のシンボルの意味を説明しておきました。例えば、「PL」と書かれたら、単数・複数が間違っているとか、「CAP」と書かれたら、キャピタリゼーションしなければならないなどです。教員による添削の他にも、学生どうしで毎週ピア・エディティングをさせました。クラスメートの書いたものを、このシンボル一覧を見ながら添削させました。他人の英語の間違いを正しく直すのではなく、シンボルで指摘することにより、書いた本人に気づかせます。人のものを直そうとすると、こういう書き方もあるんだなということも分かりますし、例えば、これは複数形になっていない、というようなことにも気付いて、自分が書くときにも注意するようになったのではないかと思います。

司会：ありがとうございました。必ずしも教員の添削だけでなくパラグラフの穴埋めのエクササイズですか、それからあとピアエディティングを取り入れるというアイデアをご披露していただきましたけども、他にもこういうアイデアが、こういう実践例があるという方はいらっしゃいますでしょうか？それでは後でいつでもこの話題に戻って結構ですので、それでは他の授業に関していかがでしょうか？1 学期にはアカデミック英語のリーディング、それからリスニングが開講されましたし、2 学期にはもう 1 つ基礎英語が開講されましたが、こちらの科目に関してはいかがでしょう？

辻先生：お聞きしたいのですけれども、アンケートの時に、確かネットアカデミーの教材のことですが、TOEIC 演習に関する課外学習の時間数が比較的短いのに授業評価のポイントが高いのではないかというような、そんなアンケートがあったと思います。僕は実際そう感じたのですが、正確な数字は分かりませんが基礎英語の時に課しているスタンダードコースというのでしょうか、あれとアカデミック英語のリーディングで課している TOEIC 演習の時間数がかなりアンバランスになっているような印象を持っていますが。そのあたりアンケートに他の先生がどう答えられていたかということと、あとそれについて何か検討されているかということをお聞きしたいのですが？

平野先生：本当はハドリー先生のほうからお答えいただくのが良いかもしれないんですけど、

もしなんでしたら補足して下さいね。結論から言いますと、少ないと感じられている先生も今辻先生がおっしゃったようにいらっしゃいますし、ちょうどいいと言う方もいらっしゃいますし、あれでも結構多いんじゃないかと言う方も確かいらっしゃったと思います。われわれとしましては、アンケートの結果がわりと1つに収斂しているならば今度改革する時に変えようかなと思ったんですが、結構バラけてしまっていたので、ちょっともう1年様子を見ようかというのが現状かと思えますけど、違いましたかね？ そんな感じですか？ ちなみにわたしの実感としては、確かに TOEIC 演習と基礎英語のほうに課しているリーディング・リスニングのコースのタスクとの間には随分差があるなと感じています。

司会:ただ今 CALL 教材のネットアカデミー2 についての話題を出していただきましたが、ネットアカデミー2 に関して何かお聞きになりたいことや、ご意見がおりの方いらっしゃいますでしょうか？

平野先生:学習喚起するということは結構大変なことだと思います。学習喚起とかどう学習させるかということですね。わたしはあんまり熱心かというと、あんまりうるさくお尻を叩かなかつたんですけど、そうするとやっぱりあんまり定期的いきちんとやるということはしてくれないんですね。たいていは最後の1ヶ月ぐらいで慌ててやり、残りの1~2割ははなから諦めて捨てているというのがいるという状況で。確か恩田先生だったかと思えますけれど、かなり熱心に促していらしたんですよ。その話を聞いてまずい、そこまではやっていないやと思ったりしたんですけど。動機付けとか、それが先生方のご負担にあんまりならない形で上手くやっていく良い方法はないかなとは常々思っているところです。あとその20%という比率がどうなのかというのも、しばしばアンケートでも上がってくることですね。われわれとしては20%ぐらいにしないと強制力がないだろうと思うわけです。20%でもさっき言ったように捨てちゃうやつがいるわけですから。それより低い例えば10%とかではもうはなからやらないだろうなというふうに思ったりもしているわけですけど、そういった成績評価へどう組み込むかという比率の問題なんかについても、常日頃思っていたらっしゃることを率直にお聞かせ願えれば参考になるんですけど、いかがでしょうか？

恩田公夫先生:僕もそのネットアカデミーの使い方について、特に先ほどあったアカデミック英語リーディングではあまりたくさんやらせないけれども20点、基礎英語のほうは結構いっぱい使うけれども同じ20点、というやり方に違和感がないことはないんですけども。ただ、今、平野さんがおっしゃったように、やはり20点ぐらいはあげないと多分学生のモチベーションにはならないだろうということで、そういう意味で

点数化する時にはやはり 20 点はあげないと駄目だろうなと思いました。それじゃバランスを合わせるために、例えば前期のリーディングのほうの TOEIC の演習はもっと時間を増やしたらどうだというふうな意見もあるかもしれませんが、それに関して言うと、あれ以上ネットアカデミーの TOEIC 演習をやらせるというのに抵抗がありました。というのは単位数が僅か 1 単位の授業に関してそこまで課題学習というかネットアカデミーをやらせると、リーディング本来の授業のための予習・復習に使う時間がもうなくなってしまいうだろうと、完全にオーバーしてしまいうだろうという気がします。ですから特に前期のリーディングに関して言えば、TOEIC 演習はあの程度で十分じゃないかと。TOEIC の出題形式に慣らせるということに意味があるのであって、あれで力を付けようというのは、あんまり期待しないで構わないんじゃないかと思っています。

それから毎回尻を叩くということですが、予め毎回の予定表みたいなのを、何月何日はここまでやりましょうみたいなのを、最初の授業で配っておいて、あと毎回授業の時に、「TOEIC 演習は来週はここまでやってくることになっています」と黒板に必ず書いて注意を促しました。それから学期の中ほどまでいったところで、学生の進捗状況を一度確認してみました。そうすると学生によっては随分勘違いしているのがいて、TOEIC 演習をやれと言ったのに TOEIC 演習じゃなくてリーディングとリスニングのほうを一生懸命やっていて、一生懸命やっていたのに全然やったことになっていない学生がいたり、かなりトンチンカンな学生がやっぱり出てきました。慌てて呼び出して注意すると、非常にショック受けたりしていましたけれども。それぐらいからかなり頻繁にチェックして、それでもなお且つなかなかやろうとしない学生は授業後に個々に呼び出して、「貴方まだやっていないでしょう」ということを言って注意を促したりもしました。最終的には、特にリーディングクラスでは、全員がきちっと全部やってきましたね。法学部の 1 番下のクラスでしたけれども「皆さんすごいね、最後にちゃんと帳尻を合わせるね」と言ったら皆大笑いしていましたけれども。はっきり言えば最後にあわてて帳尻を合わせた学生にとっては殆ど為になっていないだろうな、とは思いますが、でも一生懸命取り組んだ学生が何パーセントかでもいればやった意味があるんだなと、それぐらいのところで満足するしかないのかなという気がします。

司会：はい、ありがとうございます。ネットアカデミー2の学習時間と成績評価における 20 点という点数がありますが、そのバランスの問題となりますけれども、これに関しては皆様いかがでしょうか。他の先生はいかがでしょう？この点についても、また後で立ち返って結構ですので、他の授業例えばアカデミック英語リーディングについてでもいいですし、また他の授業・科目についても結構ですのでご意見などありま

したらどうぞ。

佐藤愛子先生： 冬眠から醒めてぼーっとして参加しているようでは申し訳ないので、せっかくの機会ですので何か喋ろうと思います。非常勤の佐藤愛子です。よろしくお願ひします。学生さんのアンケートで私の授業で好評だったのが、DVD を使った世界遺産の授業でした。それは再履修者用と共通英語の授業で、ここ数年 3 種類ぐらいの最近世界遺産の DVD を使ってみていました。題材も良かったし、ビジュアルがあって楽しめたという事もあります。手作りの教材も工夫して、リスニングでスクリプトの穴埋めが出来るように 1 枚、また和訳も部分的に穴埋めして簡略にかつ完璧に隅々まで意味が分かるように 1 枚、学生さんの満足度を上げるためにそういうワークシートを作っていました。更に最後にスクリプトの完全版を渡して、それをペアで音読させて授業を終わるようにしたので、内容の定着率は非常に良かったと思います。それで毎回、翌週にはそのスクリプトから 20 個ぐらいの単語の選択式、あるいは記述式の小テストを行いました。学生はスクリプトを良く読み込んで、一生懸命やってくれば必ず良い点数が取れるということで、最後のアンケートにも「きちっと復習をすれば点数が取れるチャンスがいっぱいあって、1 回切りのテストじゃなくてとても良かった」という感想をもらって嬉しく思いました。このような授業の現状でしたが、最近ではリーディングに特化、リスニングに特化という風な授業形態になりましたよね。まだよく私は分かっていないような感じもするのですが、そうすると、今年はリーディングを担当するので、割と上手く行って気に入っていたその DVD の授業ができなくなってしまって、非常に寂しい思いをしています。今は、春休み中に早く出版社からテキストをいただいて予習をしています。「理工英語読解」の授業の為に、このテキスト(*Science Fair*)を取寄せたのは良いのですが、ちょっと内容が込み入っていて、字数も見開きで長めでこれぐらいの分量があつて、かつ練習問題があるわけではない教科書で、どう工夫して使おうか悩んでいるところです。これからは質問になりますが、「大学らしい授業」というのを、どういうイメージでベテランの先生方はお持ちなのか、その秘訣を少しお聴きしたいと思います。例えば、全部和訳はしないとかそういうことでも良いのですが、「大学らしい授業」ということについて教えて下さい。お願いします。

平野先生：ベテランでないわたしにお教えできるはずはありませんが（笑）、最初のご挨拶のところで、大学における英語教育というのはどうあるべきかなんていうようなことを言った手前もありますので。そういったことについては企画部でも話し合いをしていますし、専任の英語教員の集会等でも議論をしたことがありますので、ある程度は合意のようなものができているだろうといささか楽天的に考えているのですが、もし

違うと思われる先生がいらっしゃったらおっしゃって下さい。それで、わたしが考える大学英語ですけれども、最初に申し上げたように、本学では統一教材みたいなものは使わないことにしたんですね。それはなぜかという、それぞれの先生の持ち味を活かしていただきたいということが1番大きな理由でした。中学や高校の授業との最大の違いは恐らくその点にありまして、つまり中学・高校では少なくとも1つの学校の中では同じ検定済みの教科書を使い、指導の仕方や練習問題も多分先生方が相談して決めた統一したものでやっているわけですね。それに対して、それが良いことか悪いことかはよく分かりませんが、大学で英語の授業を担当している教員のバックグラウンドはてんでバラバラです。わたしも今は立場上こんなことを喋っていますが一応アメリカ文学研究者のはしりですので、本当はこんな話を外に出て行ってはできないような立場の人間なんです(笑)が、それでもやっているわけです。ですが、むしろそういう多様なバックグラウンドを持っている人間が教えるということこそが大学における英語教育の1つ重要なポイントなんだと思います。それからあと教え方なんです、これも現状の大学の英語教員というのは英語教育のトレーニングを体系的に受けている人って殆どいない。殆どと言ってはいけないのかな? いても少数派なんですよ。わたしらなんかは要するに自分が大学で英語を教わってきたその時にこれは役に立ったと思うようなこと、あるいはこれは役に立たなかったからそういうようにならないようにしようと思ったこと、そういう自分の経験を基に各自メソッドというほどのものではないですけど教え方っていうのを作ってきているところがある。それが良いことなのか悪いことなのかはよく分かりませんが、大学の英語教育というのは——少なくともうちの大学の英語教育というのはそういう形で回していかざるを得ないんだろうと思います。ですからリーディングについて言うならば、和訳を使うべきでないというフィロソフィーの先生がいらっしゃったらそれはそれで構わないだろう。また和訳を与えて——一部の高校なんかではやっているみたいですけど、和訳をもう完全に与えてしまって——やったほうが良いというそういう考え方の方がいらっしゃっても、それはそれで構わないだろうと思うんです。ただ、ちょっとだけリーディングとリスニングというやんわりとした枠は作らせていただき、しかもその目的もあまり漠然としてしまうと駅前英会話学校と変わらなくなってしまうので、あと主に理系の学部等から専門に入ってから使える英語力にして欲しいという要望が強いものですから、「English for Academic Purposes」の中でもとりわけ専門に進む前ということで「General Academic Purposes」というその枠組みだけ付けさせていただいています。しかしそれは逆に言えば、その枠組みの中であればどんな形でやっていただいても100%の学生から文句が出るようなものでなければ——どんな良い授業をしたって1~2割の学生は必ずけちをつけて来ます、それは先生方もよくご存知のことかと思いますが。全ての学生が満足する授業なんてあり得ませんよね——過半数の学

生から受けて良かったと思ってもらえるようなやり方であれば、とりあえず新潟大学の全学英语教育は今ままで良いのかなと、それ以上締めるようなことはしたくないというふうに思っています。随分わたしの個人的な意見の部分が多いかと思うので、違った面からの補足をしていただければと思います。あともう1つ、せっかく楽しくおやりになっていた授業ができなくなってしまった話ですけど、前期の世界遺産に関する教材をお使いになった発展英語ですよ？ というのはわたしも先生と同じ曜限に同じテキストを使って同じ科目を開いていたんです。にも拘わらず学生は全部先生のほうに行っちゃって、わたしのところには最初1人しかやってこなかった（笑）先生のところからはじかれてきた学生たちが後でわたしのところへきたんです。それはともかく、あれは発展英語に非常に向いているテキストだと思うんですよ。今日のFDのために一応こちらで幾つかトピックを用意しているものの中に選択科目の位置付けとその開講コースのコマ数というような話もありまして、お配りしているそのカリキュラムのリストをごらんいただきますと、依然として発展英語と応用英語は残っています。2年生1学期以降履修ということで。ただ、従来は発展英語が必修だったのが選択科目になりました。しかしわれわれとしては1年生の必修4単位というのはあくまでも最低限であって、それより先にもっと取って欲しいんですね。それをどのようにして取らせていくかというのがこれからの課題なんでしょう。そして学生の需要が増えた暁には、これら従来型(?)の科目——「EGP」すなわち「English for General Purposes」という枠組みに位置付けられるかと思いますが——の開講コマ数をもっと増やしたいと考えています。発展英語・応用英語へ学生を導くための方策として今ちょっと考えているのは、副専攻ですね。副専攻の科目としても、これらは生き残っていきます。ご存知でない方もいらっしゃるかもしれませんが、うちには副専攻「外国語(英語)」というコースがありまして、殆どの科目は学部の専門の英語に関する科目なんですけど、全学英语科目の一部もリストに含まれていまして、その代表格が発展英語と応用英語なんです。だから副専攻の履修者というのが増えてくると、このあたりをもう少し拡充していくべきだなどとこの話も出てくるかもしれません。ちょっと取り留めのない話が長くなりましたけれど、以上で切り上げます。

司会：ありがとうございます。申し遅れましたけども、終了予定が14時25分ですのであと1分ほどしかありませんが、あと10分というところで大学の英語教育で授業はどうあるべきかというシンポジウムのテーマになりそうな話題を提供していただいて、議論を続けたいところではありますが。あと1分ありますけど、何か特にお聴きになりたいことはありますか？それではまた何かございましたら、英語企画部のほうまでご意見をお寄せいただければと思います。それでは今日はどうもありがとうございました。